
人魚姫は恋を知らない

青柳朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫は恋を知らない

【Nコード】

N2627E

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

復讐するの、私の大切な人を奪ったあの男に——十五歳になったばかりの人魚・リディは復讐するために人間になる薬を手に入れた。しかし侵入した城は盗賊が盗みに入っていて大騒ぎ。偶然であった青年・ジンロと共に一度逃げ出すしかなくて——。

序章

ずっとずっと、この日を待ち望んでいた。
十五歳の誕生日。

人魚が海の上へ行くことを許可される日。

「ねえ、海の魔女。私に人間の足をちょうだい」

魔女は驚いて目を丸くしていた。

大きな目を見開いて私を凝視する。

しばらくして私の言った言葉を飲み込むと、くすくすと笑い始めた。何が可笑しい。少なくとも五年前にも同じ願いを口にした人がいたはずなのに。

「——姫様、私のもとへ来てその願いを口にする者は実はそう少くないですよ。大抵は人間の男に恋をしたというものなんですけどね——あなたのような、勇ましい顔をしてそれを願う者は今まで一人もいませんでしたよ。……何をするおつもりです?」

魔女は赤い唇の端を持ち上げて、妖艶に微笑む。
それはなにか不吉を告げるように歪んでいて。

その歪んだ笑みにつられるように、私も笑った。

恋をした？

人間の男に？

そんなことはありえない。

私を突き動かすものはただ一つ。

「…………復讐するのよ」

私の大切な人を奪った、あの男に…………。

第一章

——その薬を飲めば、誰よりも軽やかに歩くことができますが、歩く度にナイフで刺すように痛みますよ——

魔女の歪んだ笑みを浮かべた赤い口と、呪文のように繰り返される言葉を思い出しながらリディは夜にそっと家から抜け出して、海面まで上昇した。

頬を撫でる風をくすぐったいと思いながら、浜辺までゆつくりと泳ぐ。すぐそこには美しい城があった。

小さな小瓶の中の、魔法の薬。

リディは瓶をぎゅ、と握り締めると一気にその中身の液体を飲み干した。

「——っ！」

悲鳴も上がらないほどの激痛がはしり、リディはその場に蹲った。ナイフで刺される程度の痛みではない。

身体の造りを変えるのだから痛むのは当然だが、四肢が引き裂かれ、身体中を突き刺されてもこれほど痛まないだろう。

リディの爪が喉元を掻き走る。

吐き出してしまえたら少しは楽になるだろうかと考え、わずかに冷静な自分が両手で口元を押さえた。吐いたら駄目。

痛みのせいかな、意識が徐々に遠のいていく。ある意味それは逃避なのかもしれない。

そのままリディはまどろみに落ちていく。

そうすることでわずかに痛みが和らぐ気がした。

——嗚呼、なんて愚かで可愛い私達の妹。人間なんか恋をしなければ、海の泡となることもなかったのに。どうしてあんな道を選んだの。

母様が時々思い出したかのように遠くを見てそう呟いていた。たくさんいる叔母様達の、一番下のおねえちゃん。大きくなるまで年の近い友達のいなかったリディにとって、一番若い叔母である彼女は優しい『おねえちゃん』だった。

でも『おねえちゃん』は五年前——リディが十歳の時に消えてしまった。

死んだのではなく、『消えて』しまったのだ。

人間の男に恋をしたから。

「——う、ん……」

痛みから逃れるための睡眠から、リディは目を覚ました。身体組織を作り変える為の激痛は幾分か治まった。まだ残る痛みは我慢しなければならぬ代償なのだろう。

まだ夜は明けていない。

空には綺麗な満月が浮かんでいて地上を照らし出している。

その月の輝きすら装飾であるかのように、堂々と構える美しい城をリディは睨みつけた。

あそこに、リディが復讐をしようと思う、男がいる。話に聞いたところによるとこの国の王子らしいが、もともと人間ではないリディが構うところではない。

唯一持ち出してきた短剣を拾い上げ、リディはすっと立ち上がる。「いつっ！」

足に体重をかけた途端に激痛が襲う。

それでも、歩けないほどではない。おねえちゃんは痛みを堪えてダンスまでしたんだから。

肩に届かないほどに短いリディの美しい金髪が夜風に揺れる。

唇を噛み締めてリディは歩き出した。微笑みを絶やさずにダンスをする必要はない。この手に握る短剣を、男の心臓に突き刺すだけ——難しいことじゃない。

予想以上に手薄な警備の目から逃れてリディは呆気なく城の中に侵入できた。

リディの素肌を夜風が撫でる。ぶる、と肩を震わせたが着る服も用意していないし、人魚だったリディには服を着るという考えがない。生まれたままの姿で運良く誰にも出会ったことなく城内を歩く。

近くから足音が聞こえ、リディは慌てて物陰に隠れた。

「おい！ 侵入者は見つかったか！？」

「いや、どこにもいない。たくっ逃げ足の速い奴だ」

城の兵らしき男二人がそんな会話をして、それぞれ別方向へ去っていく。

——ちよつと待て。

……私はまだ見つかってないよね？

それとも実はもう既に誰かに見られていたんだろうか。

警戒が強まってしまった以上、リディも充分に注意して行動するしかない。目的も果たせないまま兵に捕まってなるものか。

リディは奮起して物陰から飛び出す。

「きゃっ！」

飛び出した瞬間に何かにぶつかって、尻餅をついた。

踏ん張ろうとして力を込めた足が先ほど以上に痛んだ。足を切り裂かれてもこれほど痛まないのではないかというほどの痛さだ。このままでは歩けない。

「——っ！ なんなのよもう……」

痛みで声すら一瞬出ない。

一体なんだと、ぶつかった方を睨みつけた。

「いって、たく……」

頭を打ったのか、右手で頭を撫でながら目の前の人間が呟く。

大きな身体、短い髪、広い肩幅——それは、リディが生まれて初めて間近で見る人間の男だ。

「なんなんだよ……ってはああああ！？」

男はリディを見て叫ぶ。

頬が紅潮して、目のやり場に困ったように視線を泳がせた。

「なんであんた服着てないんだ！？ 痴女か！？ 露出狂か！？」

もしかしてもしかしくなくても、この人は私を見て叫んでる？

「だって持っていないんだから仕方ないじゃない。別に見て困るようなものじゃないし」

「困る！ 男は大いに困る！！」

なんで？ とリディは首を傾げるしかない。人魚の時は下半身は尾びれだったが、上半身は何も着てない。リディはそもそも裸でい

ることに羞恥心を感じないのだ。

男は物凄い勢いで自分の上着を脱ぎ、リディに投げつけた。

「それ着ろ！ 今すぐ！」

「邪魔……」

「女の子が服を邪魔とかいうな！ 大人しく言うこと聞け！」

投げつけられた上着を見ながら、リディがしぶると男は怒鳴った。しぶしぶといった態でリディが上着に袖を通す。男が着ていた時のように――見よう見まねだが間違えようがなかった。

「ていうかあんたなんでこんな所にいるんだ？ そんな格好で」

「それはこっちのセリフなんだけど、あなたこの城の人じゃないでしょ？」

男の服は今まで物陰から見てきた城の兵とも、使用人とも言えない格好だ。

「んー……まあ、なんだ。いろいろ事情があつてだな」

「じゃあ私もそういうことで」

男に気を取られている間に足の痛みは多少ひいた。歩けないほどではない。

立ち上がったリディの腕を男が掴む。

「ちよつと待て！ その格好でどこをうろつくつもりだ！？」

要望どおりに服を着たのにまだ問題があるのだろうか？ リディは首を傾げる。

「服は着てるけど？」

「いやまあ、そうだけど……つて前を閉めろ！ 見えるだろうが！ そんな男心くすぐる格好で歩き回ったらたちまち餌食になるぞ！ ボタンはどう留めるのか分からなかったので放置していたらまた怒られた。きよとんとしたままのリディを見てため息を零しながら男が紳士的に、極力服の中を見ないようにボタンを閉めていく。

「あんた名前は？ 家は？」

「普通はそつちから名乗るものでしょ？ そう教えられなかった？」
むしろ人魚の世界では一応お姫様になるリディに先に名乗れなん

て言う人は今までいなかった。

「正論だな。俺はジンロ。お名前をお聞きしてもいいですかお嬢さん？」

「……リディよ」

「リディね」

母や叔母とは違う、低い声で自分の名前を囁かれると不思議な響きがあった。

「ここで悪いお知らせがある。騒いでいたせいで見つかった」

ジンロがそう神妙に言うのと周囲から侵入者を探す声がして、確実に近付いてきていた。

「見つかったって……やっぱりあなたも不法侵入なんでしょ！？

どうしてくれるのよ計画が台無しじゃないの！」

「バカ！ このタイミングで大声出すか普通！？ ここにいますつてばらしてるようなもんだろぅが！」

慌ててジンロがリディの口を大きな手で塞いだが、時既に遅かった。

「いたぞ！ あそこだ！」

びく、と身を竦ませたリディをジンロが素早く持ち上げる。

荷物のように肩に担がれた。

「ちょ、ちよつと！？」

いとも軽々と持ち上げられたリディは咄嗟に抗議の言葉を呟くが、ジンロは下ろすつもりは無いらしい。

「喋るな、舌噛むぞ」

ジンロの忠告にリディは大人しく口を閉ざした。

痛む足に鞭打って走らなくても良いのは正直有り難い。

リディを抱えたまま全力疾走できるあたり、ジンロの体力はなかなかのものだ。

「盗人を逃がすな！」

追いかけてくる兵がそう叫びながら次々に脱落していく同僚を叱咤激励する。

……私盗みはしてないから、

「……ジンロって泥棒だったの？」

そうだとしたら確かに突っ込まれると痛い懐だろう。

「今日はまだ何も盗んでない。下見だからな」

結局盗むつもりなら未遂であれ問題だと思うが。そう言われれば随分と身軽だ。

脱落してはまたどこからか追っ手が増えていく。きりが無いとはまさにこのことだろう。

「リディ、おまえ泳げるか？」

——人魚に向かってその質問は失礼でしょ。

「もちろん、私泳ぎはとく……つつう！」

ジンロの忠告も空しくリディは見事に舌を噛んだ。

「じゃあ飛び込むぞ」

——え？

「とひこむ？」

舌を噛んでしまった余韻で上手く喋れない。

——ふわりとした浮遊感。

短い髪が風に舞い上がる。ジンロに抱えられていた身体が一瞬無重力を感じた。

「ひっ……いひややああああ——！！！」

一瞬の浮遊のあと、リディの身体は急速な落下を始めた。

耳を貫くのは風の轟音と自分の悲鳴だけ。

実際の時間としてはそう長くはないはずだ。しかし落ちている人間としてはその間は途方もなく長い。

どんどん近付いてくるのは漆黒の海。夜の海はこれほど不気味なものだとリディは知らなかった。飲み込まれる——そんな馬鹿げた感想さえ浮かんでしまうほど。海の中で育ったリディはその海を海面より上から眺めた経験なんてない。

着水なんてしたこともないリディは身体を打ち付けた。

どうしてこんなに痛いのかと誰かに抗議したくなる。

リディの華奢な身体は着水すると深く沈んだ。呼吸のできないもどかしさからリディは水を蹴って必死に海面を目指す。そのリディの腕が力強く引き上げられ、リディは海面に顔を出した。

海水を飲んでしまったリディを支えながら、彼女を引き上げたジンロが呆れたように呟く。

「泳げるんじゃないかったのか？」

咳込むリディはすぐに答えられず——ジンロの肩にしがみついたまま肺に酸素を送ることに専念した。

だって、人魚である時は泳ぐなんて造作もなかった。得意とかそういうものじゃなかった。

「……これが人間の身体か」

憎々しげにリディが呟く。水の中で呼吸できないなんて、不便な生き物だ。

「なんか言ったか？」

「別に、独り言。ていうか言ってから実行に移すまでに時間がなさすぎでしょ！？心の準備ってもんがあるでしょうが！！」

リディはジンロにしがみついたまま勢いに任せて噛み付く。

「あの状況で逃げ切るにはこれしかなかったからさ」
しれっとしたジンロにリディの沸点は上がる。

「私はまだあそこに用があつたのに！ 逃げたらまた侵入しなくちゃならないじゃない！」

今夜の騒動のせいで警備はより厳重になってしまつたろう。

「何をするつもりか知らないけど、リディー一人で成功するとは思えない」

きつぱりとジンロに言い切られてリディーはなお腹をたてる。

「そんなはつきりと言い切れるほどの関係でもないでしょ！？ 出会つてから一時間も経つてない！」

どれほど薄い絆か。

「いったい何が目的か知らないが、なんの計画もなく乗り込んで成功するとも？ 今日兵の注意が俺にいつてたから見つからなかったが、普通はこういかないもんだぞ」

リディーは言葉に詰まる。確かにそうなのかもしれない。しかしそれを認めるのは屈辱的だった。

「……私がどうなつたつてジンロには関係ないでしょ？」

そんなことくらいしか切り返せなくてリディーは唇を噛む。

「そりゃ、そうなんだけどさ。こうして会つたのも何かの縁つてやつだろ？ 心配するくらい許されるんじゃないか？」

許すとか許されるとか——そういう関係でもないだろう。

「とりあえず岸まで行くぞ。泳げるか？」

疑わしげにジンロがリディーを見る。着水の時の失敗がよほど響いているらしい。

「……平気」

息継ぎの技術はないが、顔を出したまま岸まで泳ぐことはできるだろう。それほど遠くない。

泳ぎの基礎は完璧だ。身体が覚えている。

先に行くジンロの姿を見失わないように気をつけて、リディーは夜の海を泳いだ。

美しく輝く月だけが二人の行く先を照らす導だった。

「——っつ！」

岸まで泳ぎ着き、地に足をつけた瞬間に発作のように足が痛んだ。痛みに顔を歪めて、無意味だと分かっているても足を何者からか守るようにしゃがみ込んだ。

「どうした？」

ジンロがリディの異変に気付き、振り返る。

弱味を見せるようで嫌だ——そんな単純な理由でリディは平気そうに取り繕った。

「なんでもない」

しかし立ち上がることができずに蹲ったままのリディを見て、ジンロがため息を零した。そして何も言わずにリディの膝の裏に手を差し入れる。

——海に飛び込んだときと似た浮遊感。

肩に担がれた時とは打って変わって、丁重なお姫様だっこだ。

「ちよっ……なんでもないってば！」

「んなわけないだろ。騙したいならもっと修行積むんだな。足痛めたんだろ？ 飛び込んだ時なら少しは俺にも責任あるし」

そのまま有無を言わずにジンロは確かな足取りでどこかへと向かう。

リディはただ困惑しながら、ジンロの胸にもたれかかった。

布越しに伝わるジンロの鼓動が子守歌になったのか、気がつけばリディは浅い眠りに落ちてた。

第二章

「あんた何考えてんの！？　こんな可愛い子誘拐してきて！　うち
は盗みはしても人売りだけはしませんからね！！」

「誰が売り払うって言った！？　救助だ救助！！」

「何よあんたロリコンだったの！？　どうみても十五、六歳でしょ
うその子！」

「なんでそうなる！？　俺が人助けしたら可笑しいか！？」

ああもつ、うるさいなあ。

静かに寝させてよ。なんだかすごい眠いんだから。

男女が言い争う声でリディは深いまどろみから覚醒した。

「——うるさい」

眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに呟く。

見上げるとすぐそこにジンロの顔があつて、まだあのお姫様だつ
この状態なのだと気づかされた。

「ああ、悪い。起こしたか」

「……なに、なんの騒ぎ」

まだ重たい瞼を擦りながらリディが辺りを見回す。

すぐ目の前にいた女性と目が合つて、お互いに見つめあつた。

「——どうも」

たぶん先ほどからうるさかつたのはこの人とジンロが言い争つて
いたんだろう。

すると女性は急に真剣な顔つきになり——リディの両手を握り締
めて問う。

「この変態に何かされてない！？　正直に言ってくれていいんだか
らね！！　あたしが代わりにしばいてあげるから！」

「だから何もしてない！！」

人聞きの悪いことを言うなとジンロが怒るが、女性は完全に無視してリディの答えを待っている。

何かと言われても——急に荷物のように抱えられたり、海に飛び込まされたり、お姫様だっこされたり——けれどこの人が聞きたいことはこういうことではないだろう。

「何もしてないならどうしてこの子こんな格好してるのよ！ あんた手え出したんじゃないの!？」

「こんなガキに誰が欲情するか！ 目のやり場に困るからこっちは親切心で上着着せてやったんだろうが！」

「目のやり場に困るってことは少なくともその気になるってことじゃ——」

どうやら自分の格好は大いに誤解される姿らしいことだけは理解できた——予定を狂わされた恨みはあるが、無実の罪を着せるのは忍びない。

「あのー……ジンロは私が着るものなかったから上着を貸してくれただけで、どうこうされたわけじゃありませんよ」

控えめなりディの援護に女性は追及の手を止める。

じろりと一度ジンロを睨みつけて、リディに向き合う。

「まさかとは思うけど嘘をついてまでこいつを庇ってたりしてないわよね？」

「嘘をついても私に利益はないじゃないですか。この人がどうなるうと知ったこっちゃないけど、無実の罪を着せるのはさすがに良心が痛むんで」

さらりと言い返したリディの顔をじっと見つめて、どうやら女性には納得したようだ。

「本人がそう言うなら信じるわ。もっとまともな服を貸してあげるから、一緒においで。……えと」

「リディよ」

答えながら、リディはゆっくりと地に下ろされる。

忘れかけていた足の痛みが一瞬蘇ったが、ひどくはない。

「リディね、あたしはセナよ。よろしく」

につこりと笑うと太陽みたいな人だ。セナの亜麻色の髪が風に揺れる。

「……ここは？」

リディは周囲を見回し、前を歩くセナに問いかけた。

周りには背の高い常緑樹があり、まるで家を隠すかのように包み込んでいる。

「隠れ家って言えば分かるかしら。堂々としているわけにはいかない職業だしね」

「ああ、泥棒なんだっけ」

木々に隠されるように建てられた数軒の家はジン口の仲間のものなのだろうか。

「できれば盗賊って言うて欲しいわ。その泥棒って言い方嫌いなよね。または義賊とか」

「義賊？」

「そうよ、あたし達は金のあるところからしか盗みはしないわ。昼になったら見てみればいいけど——ここにいるのは子供ばかりよ。皆親がいないの。道の隅で死んでいくしかなかった子達なのよ。なのに金持ちは毎日贅沢三昧で、たった一つのパンさえあれば死ななくてすんだ子供に唾を吐き捨てて生きてるのよ。不公平だと思わない？」

リディは黙り込むしかできなかった。

人魚の王の孫娘として——リディは何不自由なく生きてきた。飢えることなんてなかった。それでも人魚の世界は人の世界よりも優しかったのだろう。親がいなくても、助けてくれる人はたくさんいた。人のように地に満ちるほど大勢いるわけではないから、皆が家族のようなものだった。

「だからあたし達は奪われたものを奪うわ。生きていくために」
しっかりとした意思を感じさせる声だった。

セナは家の扉をゆっくりと開ける。もう夜は更けている。ここに

いる子供達を起こさないように気を遣っているんだろう。

「ちよつと待ってね——……ああ、これなんかでいいかしら？ 髪の色にも合うと思うし」

そう言いながらセナが引つ張り出したのは赤いワンピースだ。服に関しては特に要望のないリディは素直にそれを受け取った。

手早く着替え、セナの私室から出るとすぐその居間にはジンロがいた。

用意周到に温かい紅茶が用意されている。思いのほかに気配りの良い男らしい。

「ああ、やっぱりそういう格好の方がいいな」

ジンロはリディを一目見てそう感想を述べる。

かぁ、と自分の顔が熱くなったのを感じて、リディは俯いて赤い顔を隠した。どうしてだろう。赤くなるようなことなんて言われてないはずなのに。

「髪の色にも似合うでしょう？ 瞳に合わせて青とかでも良かったんだけど、やっぱり若いうちは明るい色を着ないとね」

嬉々としてセナがリディの服について語り始める。

そして話題が髪に触れたところで、セナが肩に届かないほどに短いリディの髪に触れて残念そうに呟く。

「せっかく綺麗な金髪なのに——どうして切っちゃったの？」

切りたくはなかった——けれど、価値のあるものはそれしかないかっただのだ。

「……仕方なかったの、代償だから」

「代償？ なんの？」

ジンロのそれは好奇心からというよりは純粹に話の流れからの質問だったのだろう。

リディは少しだけ沈黙し、口を開く。

「——復讐の、道具を手にいれるために」

リディの長い金髪はどの人魚の髪よりも美しかった。かつて叔母が美しい声と引き換えに人間の足を手に入れたように、リディは長

い金の髪を魔女に与えることで足を手に入れた。

「……子供が復讐なんて考えるもんじゃないわよ」

セナの声色が変わる。怒っているような、諭すような、そんな声だ。

母もこうだろうかとりディは頭の隅で思った。

「私の育ったところでは十五歳はもう大人よ。子供じゃないわ」

「そういう年頃のカキこそ子供じゃないって言い張るんだよなあ」

明らかに馬鹿にしたようなジンロのセリフに、リディはむっとする。すぐに言い返さなかったのはわずかばかりの理性のおかげだ。ここで怒って言い返せばジンロはますます子供だと言い張るのだから。

「……セナはさっき、世の中は不公平だから盗むって言ったよね？ 私だってそうよ。私の大切な人は恋をして、そして結果的に消えてしまった。でも相手は生きてるの。不公平じゃないかしら？」

その男は恩人の顔も分らず勘違いして他の女と結婚したのよ。本当に助けたのはお姉ちゃんだったのに！ そんな馬鹿な男に復讐することくらい神様だって許してくれるんじゃない！？」

ただ恋をした。それだけだ。

それなのにどうして泡になってしまふのだろう？ 相手の男は幸せに暮らしていけるのに、生まれ変わることも出来ず、あの残酷で優しい海の一部になってしまつて。

「……大切な人って、リディのお姉さん？」

セナはリディの肩にそつと触れ、椅子に座るように促した。リディは力が抜けたようにずとんとそのまま腰を下ろす。

「正確には叔母様よ。年が近かったから姉妹同然だったけど」

ジンロがリディの向かいに、そしてセナがリディの隣に腰を下ろした。

言ってしまったでもいいだろうか——リディが人魚だということを。「その人は、死んでしまったの？」

遠慮がちに、問いかけてくるセナ。

死んではいない——死よりも残酷な仕打ちであることに違いはないが、それを説明するにはやはりリディが人魚であったことを話す必要があった。

別に、この人達に化け物と呼ばれようと拒まれようと、心は痛まない。

「死んだんじゃないわ……消えたの。海の泡になって」
何故か上手く口が動かない。

誰に否定されようと、怖くなんてないはずなのに。

「海の泡？ お伽噺の読みすぎじゃないのか？」

茶化したようなジンロを、リディはただ静かに見つめた。

その真剣な目にジンロは思わず黙った。

「——あれがお伽噺なら、これはその続きでしょうね。そしたらジンロもお伽噺の登場人物の一人だわ」

年相応でない、静かな呟きにセナもジンロも苦しげに眉を顰めた。

「……人魚の世界には、時々いるの。人間になりたくて海の魔女と取引する人魚が。私もお姉ちゃんもその中の一人よ」

「人魚？」

信じられないと言いたげにジンロがリディを見つめた。セナも言葉にはしないが、その目を見れば分かる。

「信じてくれなくてもいいわ——お姉ちゃんは人間の男を偶然助けて、そいつに恋をした。側にいたいからと声と引き換えに人間の足を手に入れた……けれど男には婚約者がいて、その恋は叶わなかった。足はまやかし。目的を果たしたその時に、本当の足になる。目的を果たせなかったその時は……海の泡になって、消えてしまう」
「その男は自分を助けてくれた女に惚れたが、本当に助けたのはリディの叔母さんだったってことか？」

化け物と罵る声を覚悟していたリディは拍子抜けした。

ジンロは今までとまるで変わった様子はなく——優雅に紅茶を飲んでいる。

「……信じるの？」

「信じる信じないは俺の自由だ。リディが素っ裸で歩き回ってたのも元は人間じゃないっていうなら納得できるし」

「怖くないの？ 人魚は人を殺すことだってあるのよ」

人魚と同一視されるセイレーンは歌声で船を難破させる海の魔物だ。人魚の中にはそういう人もいるから、人間は化け物と呼ぶ。

「どうして怖がらなくちゃいけないんだ？ リディは今人間で、非力な女の子だろ？ リディ相手だったら俺が勝つに決まってる」

断言されてリディは少し腹が立ったが——実際に人魚の時に、地に利がある海でならばまだしも、痛む足を持った人間の状態の今ではまるで勝ち目がない。ジンロはリディより十歳近く上に見える。

「リディは——その髪を引き換えに人間になったのね」

見ている方が苦しくなりそうなくらいに、痛々しい顔でセナが呟いた。質問というより、もはや確認のような呟きだ。

「……それくらいしか、無かったから」

苦笑しながらリディは短くなった毛先に触れる。

その無理に大人びた表情に、ジンロもセナも切なくなった。本当なら、もっと大人に甘えていい年頃だろうに——彼女は、そういう子供でいることを選ばなかった。

それが哀れだと思われるのを、彼女は望まないのだろう。

「おまえが復讐しようとしている男が、あの城にいるんだな？」

ジンロの問いに、リディは一度深く頷いた。

「——明後日、俺を含めた数人で、本格的に盗みに入る。……ついてくるか？」

正確にはもう明日というべきなのだろう。あと数時間で朝日が昇るような時間だ。

今日の騒ぎで数日間城内の警備が厳しいだろう。しかし盗賊集団が入ったなかでならリディはそれほど目立たないだろう。

「……いいの？」

どうしてそんなに親切にしてくれるのか、リディには分からなかった。

「ついでだからな」

そう言いながらジンロが横を向いたのは、照れ隠しのためでもあったのだろう。

くす、と微笑みながらリディは小さくありがとうと呟いた。

その笑顔は幼く、年相応の愛らしいものだった。

第三章

その夜はいつもよりも騒がしかった。

眠るリディが起きて外に出ても大人は誰も咎めなかった。そんな余裕すらないようだった。

母が慌てて海面へと昇る。綺麗な長い髪が無惨にも短く切られていた。母に続く叔母達も皆同様に。

——なにがあつたの。

少し前に突然いなくなってしまった年若い叔母のことを思い出した。

他の人魚までどこかにいつてしまうんじゃないか——そんな不安に駆られてリディはこっそりと母親達を追いかけた。いつもなら気づくであろうリディの下手な尾行にも気づかないほど、母も叔母達も切迫していた。

ああ、このままでは海面に出てしまう。

十五歳に満たない人魚は海の外へは出てはいけない。その決まりがリディを押しとどめた。

だから海のなか、上を見上げたまま様子を見守った。

『——の短剣で……を……せばいいのよ。そうすればあなたは

……ど、人魚に……』

『そ……な男……なさい』

『どうして！？ 戻りたくないの！？』

『——！！』

しばらく話し声は続いたが、母も叔母も後ろ髪引かれながら海の

底へと潜っていった。

自分の部屋に戻っていないと、いなくなったのがばれてしまう——そう思ってたリディも戻ろうとした。

しかし何かに引き止められているような気がした。あの優しいお姉ちゃんの歌声が聞こえた気がした。

たぶん、きっとあの様子では抜け出したことには気づかない。

そう自分に言い訳して、リディはしばらく海の上の、ぼやけた夜空を見ていた。夜の海は漆黒に染まり、空もまた同じように黒くなる。どこまでが海で空なのかも見分けはつかない——ただここまでの海面に近づくと、ぼんやりとした満月の光が霞んで見えた。

その満月の光がどんどん見えなくなり——気がつけば海が赤く色づき始めていた。

それが朝の訪れだと、小さなリディには分からなかった。

海の外には、色が溢れてるんだ——そんなことに感動しているリディの目に、赤以外のものが映った。

溶けて、溶けて、溶けて——。

髪先从つま先まで、余すことなく海の一部になる。

『……………おねえ、ちゃん……………？』

それは優しい優しい叔母だった。姉のように慕い、実の姉妹のように仲良くしてきた。

瞳から零れたように見えるのは涙だろうか——次の瞬間にはそれすらも海に溶け、海水なのか涙なのかも分からない。

一度も見たことはない涙だった。

海の中で涙なんて見えない。けれどリディには分かった。

——泣いている。

それから五年かけて、口を割ろうとしない大人たちから情報を得た。

あのお姉ちゃんを泣かせた——そしてその男ときたら。

復讐するには、充分すぎるほど愚かな男だった。

「——リディ」

低くて優しい声が耳をくすぐる。

「——う、ん……？」

まだ重たい瞼を擦りながらリディが起き上がる。

「朝だ——ていうかもう昼だけどな、いいかげんに起きろ」

ぼんやりとした頭が動き出すまでにはしばらくかかり——目の前にいる男が誰なのか判別するまでにさらに時間がかかった。

「……じんろ？」

「……まだ寝てんのか」

ジンロが苦笑いしてリディの頭を撫でる。

そしてもう一度起きろよ、と念を押された。

そのやり取りでリディの脳も覚醒する。ここは、ジンロ達の隠れ家。

「……おはよう」

「早くないけどな。寝たのが遅いから仕方ないだろ」

そう言いながらジンロが着替えを渡してくる。部屋に来たのはそのためだったのだらう。

渡されたのは淡い水色のワンピースだ。

「着替えたら出て来い。腹減ってるだろ」

ぽん、と一度頭に手を置いて、ジンロは部屋から出て行く。明らかな子供扱いにむつとするが——文句を言う前に相手はいない。

そして現実を訴えるかのように腹の虫は悲鳴をあげる。

「……………くそう」

ぶつける相手がいないので、リディは一人でぶつぶつと悪態をつきながら、器用にも座ったままで着替えを完了する。

痛む足で立ち上げれば、裾がふわりと広がる。

縁取られた白いレースがひらひらと揺らめき、乙女なら誰でも目が奪われるであろうそれにリディも例外なく見惚れた。

「リディー？ ごはん食べないの？」

扉から顔を出し、セナが声をかける。

「た、食べる！！」

飯抜きにされてはたまらないとリディが即座に答える。

「じゃあいらっしやい。やっぱりそういう色も似合うわねー」

眩しい昼の光にリディは目を細めた。

深海にはない明るい太陽の光。

部屋から出て、リディは吸い寄せられるように窓の向こうの世界を見た。

「——ああ」

思わず声が零れた。

世界にあるのが青だけじゃないと、知っていたけど。

こんなにも世界は眩しいものだったんだ。木々も緑も、空の青も、花々の鮮やかさも、海にはない色だ。

なんて——なんて温かな色だろう。

「どうした？」

窓の向こうを見つめたままのリディに、後ろからジンロが声をか

けた。

「世界は、こんなに綺麗なんだね」

目は窓の向こうの美しい外を見つめたまま、リディは吐息を零しながら呟く。

「足は痛いし、水の中で息はできないし、寿命なんて三分の一だし——人間になっても良い事なんてないと思ったけど、違ってた。こんなに優しい世界の中で生きていけるんだもの。人間でとっても幸せなんだ」

「——そう思える人間は少ないけどな」

ジンロが苦笑しながら、リディの目の前の窓を開けた。

優しい風がリディの頬を撫でる。緑の匂いがした。

「どうして？」

「リディはリディの世界がこの上なく素晴らしいもので、そこにいるだけで幸せなんだなって言われても、ハイそうですって答えられるか？」

海の底は冷たく、光がなく、それが当たり前だからなんてことはないし、海面近くまで昇れば色鮮やかな珊瑚もある——けれど、ジンロの問いに即答できない。

「……無理、だと思う」

「つまりはそういうことだよ。人間にとってはこれが当たり前だから、素晴らしいことだなんて気づけないんだ」

「なんだか、悲しいね」

自分が生きている世界は他から見たらとても素晴らしいのに——そこにいる人はそれに気づけないなんて。

「そうか？——こうして、リディみたいに気づかせてくれる奴がいるんだから、悲しくなんてないだろ。そのために世界にはたくさん生き物がいるんだから」

言葉を持つのが、人間と人魚だけだとしても、とジンロが付け加える。

この色鮮やかな世界に、人魚は心奪われるのだろう。
だからこの世界の男に恋をするんだろう。

恋をしたから、人間になるんじゃない——人間になりたいから、
恋をする。

たぶん人魚達は——人間の世界に恋をするんだ。

「そこのお二人さん？ いらないならごはん片付けるわよ？」

ジンロとリディの後ろで仁王立ちになりながらセナが問いかける。

「た、食べます！……ってジンロも？」

もう昼近くなのでつきり皆朝食は済ませたものと思っていた。

「当然だろ。おまえと寝た時間そう変わらないだろうが」

それもそうだとリディは素直に納得する。

むしろジンロにここまで連れてこられる間寝ていたリディとは違い、総合的にジンロは睡眠時間が短いはずだ。

大きめのテーブルの隅の方に、ジンロと向かい合わせで席に着く。
おそらくここに保護された子供達だろう——家の外ではしゃぐ声
が聞こえる。窓からは涼やかな風。目の前の温かい食事。

人間なんて、どうでも良かった。

目的さえ果たせばそれで良かった。

——なのに、どうしてだろう。

今リディは、少しでも長くこの穏やかな時を過ごしたいと心から
思っていた。

「……命をかけても良いって思えるほどの恋ってどんなの？」

ちぎったパンを口に放り込みながらリディが何気なく目の前のジンロとセナに問う。ジンロは早くも朝食を食べ終わってしまってい

て、リデイがゆっくり食事するのを眺めていた。

「なんだ急に」

「——別に、ただ……お姉ちゃんは、人魚に戻る方法もあったのに、それを選ばなかったから……自分が消えても良いって思えるほどの恋って、どのくらい素晴らしいものかなって」

母と叔母の髪と引き換えに手に入れた短剣で、男を刺せば人魚に戻れると——そう説明されたのに、受け取ることが無かった。

「お姉ちゃんは泡になりながら泣いてた……泣いてたけど、とって綺麗に微笑んだ。あの表情の意味が私は今も分からない。消えることに満足してたわけじゃないのに、どうして笑えたんだろう」

「……おまえな、二十三歳の青年にそんなこと聞くな。その質問に答えられるほど素晴らしい恋愛なんてしてねえよ」

「ジン口って二十三歳なんだ」

「人の話を聞け」

ごつんと頭を叩かれる。強くはないが、そんなこと親にもされたことないのでリデイはむっとするばかりだ。

「年齢は関係ないでしょ、お姉ちゃんは十五歳だったんだもの。今の私と一緒によ？」

言い返すとジン口は面白くなさそうに睨んできた。

そんな二人を傍観しながらセナがくすくすと笑い出す。

「そうねえ、恋に年齢は関係ないもんねえ。そういうのは人それぞれに運命の出会いってやつがあるんじゃない？」

「セナさんは？」

「あつたらこの年まで一人身でいないわね」

そう言うセナはどうみてもまだ二十代前半だが——それまでまったく出会いがなかったとも思えないが、リデイはそんなに色恋沙汰に興味があるわけでもない。

「すべてを投げ出してもいいって思えるほどの決意は凄いことなんじゃないかしら。どんなことであつてもね」

「ガキを褒めるな、図に乗るぞ」

人魚として生きてきたすべてを投げ出す——暗にリディも褒められたが、即座にジンロが釘を刺す。

「ガキじゃないもん」

「十五歳はまだガキなんだよ、人間の世界じゃ」

そういうジンロはたった五歳上なだけじゃない、とリディが膨れる。三百年の寿命を持つ人魚からしてみれば五年の差は小さい。

「……完璧に子供ってわけでもないけどな。ちょうど大人と子供の境目ってとこか」

そう言いながらジンロの大きな手がリディの頭を撫でる。

それが子供扱いだと分かっているにも嫌じゃないと感じてしまうのはやはり——まだ子供だからなのだろうか。

「自分で決めたことの責任は自分でとらなきゃいけない。けどまだリディは大人に甘えて良いんだ。失敗した時は大人に泣きつけば良い」

「——例えばジンロとかに？」

現在のところの身近な大人に問いかけると、優しく微笑まれて「そうだな」と答えられてしまった。困らせるための言葉だったのに、そんなに優しい顔をされると何も言えない。

「甘えさせてくれる大人がいて、甘えられる年齢のうちに甘えておけ。大人になったらそれすら出来なくなるんだから」

髪を撫でる手は本当に優しい。

本当にこのまま寄りかかってしまいそうで、リディは泣きたくない。つた。

すべて一人で、誰にも頼らずに目的を果たそうと——そう思っていたのに。

「……どうしてそんなに優しいの」

ジンロにとってもセナにとっても——リディは赤の他人で、もとは種族すら違うのに。

「性分なのよ。あたしもジンロも、気がついた時には親がいなくて子供の力でもうにか生きてきたわ。でも大人に助けて欲しいってど

こかで思ってるのよ、助けてくれるような大人なんて一握りしかないって心のどこかでは分かってるのに——分かってるからこそ、自分達は大勢のろくでもない大人にはなりたくなかった。どんな子供でも、毎日笑っていて欲しかったの」

自分がそういう子供になれなかったから。

そう言いながら微笑むセナの顔が痛い。

自分はこの人達に守られる資格のない子供だと。

そう声高に叫びたい。

恵まれて育った、愛されて育った、復讐なんて考えるのも——結局は自分のためなのに。何も出来なかった自分を慰めるだけの行為なのに。

優しさが痛む足よりもなお胸に痛い——そう思うのに、その優しさに全身浸かってしまっている駄目な自分。
情けなくて涙も流れなかった。

第四章

「馬鹿リディ！ そのまま干すな！ 皺を伸ばせ！！」

ただで置いてもらうわけにはいかないと、お世話になる間はせめて家事でも手伝うと言い出したのはいいものの、リディはまるで使えなかった。

海の中で洗濯するなんて考えがないから上手く出来ないのは当然なのだが。

「し、しわ？」

「見てろ、こうやって——」

何故カリディに家事を教える破目になったジンロが至極丁寧に教えてくれる。口も態度も悪いが良い先生だ。

パン、と音をたててシャツが綺麗になる。

「凄い！ どうやったの！？」

「見たまんまだよ。コツなんてない」

「う、嘘だー！」

嘘についてどうするとジンロに言い返されるが、リディが見よう見まねでやってみてもシャツはしわくちゃのままだ。

「むむむ……」

シャツを睨みながらどうしたものかと唸るリディを見てジンロは苦笑し、リディの頭にぼん、と手をのせる。

「そのうち出来るようになるだろ」

そう言い残してジンロは行ってしまった。

——そのうちっていつ？ 私がここにいる間に？

そもそも——復讐を果たして、人間になったら私は……どうすればいいんだろう？

消える。

溶けて、溶けて、溶けて――。

髪の毛も爪の先もすべて残らず海の泡となって。
暗い暗い海底に飲み込まれる。

私が存在したという証拠も残らない。

消える。

私のすべてが。

「――っっ!!」

布団を跳ね除け、起き上がる。

心臓が壊れそうなくらいに脈打っていた。呼吸が一向に安定しない。
い。

「ゆめ……」

確認するようにリディは呟く。

泡となり消える夢。

ただの夢だと笑い飛ばすことが出来なくて、リディの身体の震えは一向に治まらなかった。

リディの隣のベットではセナが規則正しい寝息をたてて熟睡している。起こすのは悪いとリディはベットからおりて、部屋を出る。
外に出ればそこには満点の星空があった。

この世界は凄い——夜にもきちんと色がある。月は優しく地上を照らし出し、星達はお互いに輝きを競っている。森の中に潮の香りは届かない。少しそれが寂しくもあったが、今はむしろ緑の香りの方が安心した。

胸に溜まっていた重い息を吐き出し、そのまま地面に座る。立ちっぱなしでいるとやはり少し足が辛い。

——復讐する。その決意は決して揺らがない。

短剣を男の胸に突き刺して、この五年平和に暮らしてきたことを悔やませてやる。

その後は？

「……どうすればいいんだろ」

考えてなかった、否、考えることを拒否していた。

人魚に戻ることは出来ない。人間として生きていくしかない。

ジンロやセナや——この人々は受け入れてくれるだろうか。ここにいても良いと言ってくれるだろうか。

そんなことを考えて、また人に甘えていることに気づく。いつまでたっても結局一人で立ち上がることが出来ない甘ったれ。

「——リディ？ まだ起きてたのか？」

頭上から降ってきた声にリディは顔をあげる。

「……ジンロ」

今までどこにいたのか——ジンロは夜着ではなくいたって普通の服を着て、森の外から帰ってきたようだ。

「子供はもう寝る時間だぞ。夜更かしするな」

相変わらずの子供扱いでジンロはリディの頭を撫でる。

怖い夢を見て眠れないなんて、まさに子供だ。

「……寝れないんだもん」

眠ればまたあの夢を見そうで怖い。

泡になり消えていく自分を見るのが怖い。

「怖い夢でも見たか？ 外はまだ冷えるから家の中に入れ。良いもの作ってやるよ」

「……いいもの？」

家に入ってジンロから渡されたのは甘いホットミルクだ。

「それ飲んだら大人しく寝ろ」

そう言いながらジンロはリディの向かいに腰を下ろす。

「……どこ、行つてたの？」

ちょうど飲みやすい温度になっているホットミルクを一口飲んで、リディは問いかけた。甘い香りに恐怖も和らぐ。

「例の城に。下見は何度か行かないと意味ないからな」

「一人で？」

「今日はもう何人かと一緒だ」

では実行の時も数人でやるのだろう。

昼間はジンロやセナ以外の大人はほとんど見ないから、いつもどこかに出かけているのだろうと思っていた。

「安心しろ。リディには俺がついていくから。復讐する相手とやらはあの城の奴なんだろ？」

聞かれてそういえばまだ言っていなかったな、とリディは思う。

「——あの城にいる王子様だよ」

ちらりとジンロの顔を見ながら答える。

一瞬だけ沈黙し——そうか、と短く答えた。それだけだった。

「もう、明日だ」

ジンロが立ち上がりながらそう言う。

首を傾げて見つめるリディにジンロは続けて言う。

「決行は明日の夜。夕暮れには準備を終えて出発する……ゆっくり寝とけ」

優しい手がまたリディの髪を撫でる。

見上げるとジンロが少し困ったような微笑みを浮かべていた。どうしてそんな顔してるの。

そう問いかけることは出来なかった。リディは急激な睡魔に襲わ

れ、たやすく夢の世界へと誘われる。

「お子様には少しきつかったか」

ジンロが苦笑して、リディを抱きかかえる。

リディに飲ませたのはブランデー入りのホットミルクだ。

ベットまで運び、風邪をひかないように布団をかける。おやすみ、と小さな声で囁き部屋から出る。

「——良い夢を」

泡になる夢は、見なかった。

いつもセナの趣味でひらひらのワンピースを着せられていたリディだが、今日ばかりは違う。

動きやすい格好ということと結局少年のような姿になってしまった。短い髪といい、ぱっと見た限りでは少女とは思わないだろう。

ブランデー入りのホットミルクのおかげでリディは昼近くまで熟睡していた。

目を覚ませば着々と準備は進んでいる。

いつものように洗濯を手伝い、掃除をしている間に夕暮れになっていた。

「リディ」

夕飯の準備を手伝ったいたのだが、ここまでみたいだ。もう一度セナさんの料理が食べたかったな、なんて考えているリディをセナは少し心配そうに見送る。

「いつてらっしゃい、気をつけるのよ。夕飯は残しておいてあげるからね」

——いつてらっしゃいがあるということとは。

「……私、ここに帰ってきててもいいんですか」

復讐を遂げたその後にはもう消える繋がりだと思っていた。きょんとした顔でリディは問うと、セナは本気で怒った。

「何馬鹿なこと言ってるの！？ リディはもう身内でしょー！？」
そう言いながら頬をつねられる。

ああ、いつの間にかもう身内だったんだ。

気づかなかった自分が可笑しくてリディはくすくすと笑う。

「帰ってきなさい、約束よ？」

はい、とリディは短く答える。

復讐を遂げて、そして——この森に囲まれた場所で、子供達と一緒に過ごして、時にはこうしてジンロと共に盗みに出る。そんな暮らしもいいかもしれない。

「いつてきます」

太陽が壮絶な微笑を残して消えゆく夕暮れ。

空が真っ赤に染まり、それを映し出す海すらも赤い。

世界が赤く染まるのはほんのわずかな時間だった。すぐに太陽は海の方こうに飲み込まれ、世界は夜を迎える。

第五章

その日は新月だった。

月がないから、地上を照らし出すのは星達の小さな輝きだけ。盗みにはもってこいの日。

実行犯は思いのほか少なかった。ジンロとリディを除いて五人――その他城外に待機しているのが三人だけだ。

挨拶をしている場合でもない、リディは軽く会釈するだけで済ませた。事情はすでにジンロから通達済みらしい。

ジンロが仲間と動作だけで合図をして別れる。リディはジンロの後を当然のように行行った。

懐にはきちんと短剣がしまわれている。

「リディ、走りながら聞け」

ジンロがリディの隣まで合わせて、声を潜めてそう言った。リディが頷くと、ジンロは苦笑した。

「――世の中には、誰かを憎まないと生きていけない奴がいるんだ」何の話だろう、とリディは思いながら黙って耳を傾けた。

「そうしないと、辛くて生きていけなかったり、悲しみに押しつぶされたりする。仕方ないんだ、生き物は弱いもんだからさ」

ただ、とジンロの顔が曇る。

「目的を失ったら、どうなると思う？ 憎む相手がなくなってしまうたら？ ……どうやって生きていけばいい？」

「――何が言いたいの、ジンロ」

ジンロの顔を見ることができず、リディはただそう呟く。

ジンロはリディのことを心配しているのだ。ここで復讐を果たしたら、リディは生きる目的を失ってしまうから。

「……この先に何があっても、自分を見失うなよ。前に言っただろ、リディはただ素直に笑っている方がいい」

そう言つて、ジンロが立ち止まる。

リディもそれに合わせて走るのを止めた。行き止まり——否、扉があった。

ここが目的の場所。

この向こうに復讐する相手がいる。

「——私はこの五年ずっと復讐のことだけを考えて生きてきたの」
懐から短剣を取り出し、リディが呟く。

ジンロの視線が痛くて、リディは俯いたまま顔をあげなかった。

「復讐は、私が自分を罰するためのものなの。何もできなかった私に対する罰であり、仇討ちなの」

許せないものを罰する——自分と、相手の男を。

「でも私——これが終わったら恋を試してみたい。お姉ちゃんみたいに全てを投げ出してもいいと思えるような恋が」

「……できるよ。きっと」

俯いたままのリディの頭を、ジンロが優しく撫でる。いつもより優しいジンロの口調に、涙腺が壊れかける。

泣くのは嫌でリディは必死に涙を堪えた。まだ泣いて、甘えていい時じゃない。

ジンロがゆつくりと扉を開ける。

リディは自分の息を飲み込んで、短剣を強く握り締めた。

その部屋の空気に、リディは啞然とした。

真っ暗な誰もいない部屋。

人のぬくもりを感じない。抜け殻のような空間だけがそこにあった。

綺麗に掃除されていて、埃なんて少しも積もっていないけれど、すぐに分かった。この部屋は使われなくなって随分経つのだ。

部屋の作りは十分すぎるほどに豪華だった。間違いなく、この城の主の寝室だ。

「——どういうこと？」

リディは振り返り、ジンロを見る。

答えを彼なら知っているはずだと——なんの疑いもなく思った。

「……もういないんだよ。リディ。この部屋にいるはずの奴は、五年前に死んだ」

そのジンロの言葉を飲み込むまでに、どれほどの時間がかかっただろうか。一瞬のようで、永遠のようでもあった。

ジンロの言葉が何度も何度も頭の中で繰り返された。

強く握り締めていた短剣は、緊張の糸が切れた瞬間に絨毯の上に落ちた。

「……………死、んだ？」

五年も前に？

呆然と立ち尽くすリディを見つめながら、ジンロが答える。

「おまえが復讐しようとしていたこの城の王子は、五年前の新婚旅行で船が難破して……数日後に浜に遺体が打ち上げられていた。奥方は無事らしいけど、この城にはいない」

「じゃあ、お姉ちゃんが消えた、すぐ後……？」

「……そうなるな」

リディが膝から崩れ落ち、暗い部屋の中でもう五年も主に座ってもらっていない椅子を眺めた。

「じゃあ、これまでのこと——全部無駄だったの？」

もう生きてもない男を憎み続け、復讐しようと誓って。

その為に海の外へ行くことを、どれだけ待ち望んでいたか。

「……言ったろ。誰かを憎まなければ生きていけない奴がいるってリディがそれだった。意味は確かにあったよ……リディを生かし続けた」

ジンロは復讐する相手がもういないことなど、ジンロは気づいていたはずだ。けれどそれはリディを支える目的だったから——こうしてリディ自身がきちんと目の当たりにするまで黙っていた。

「もう、ここに用はないだろう？ 帰ろう」

ジンロはリディの前にしゃがみ、俯いたリディの顔を覗き込みながら優しく問う。

「……無理だよ。帰れない」

ぽつりとリディが呟く。

「——リディ？」

「お姉ちゃんのこと話したでしょ？ 目的を果たせなかったら、私達人魚は海の泡になる。もうすぐ夜も明ける……私、消えちゃう……」

急に目の前に現れた現実には、リディが震えだす。

消えるわけがないと思っていた。迷いなんてなかったから、復讐が果たせないことなんてありえないと思っていた。

「怖い……やだ。消えたくない……私、帰りたい。セナさんと、約束したのに……」

震える身体を抱きしめるように、リディは両腕を抱えた。

この身体で、あの優しい風も、木漏れ日も、子供達が遊ぶ声も——感じる事が出来なくなるのか。

「ジンロ、やだ。……助けて」

「リディ……」

涙が今にも溢れ出しそうなほど瞳に溜めながら見つめるリディの小さな身体をジンロが抱きしめる。

「大丈夫だ、大丈夫だから……」

言い聞かせるように耳元で囁くジンロの声を聞きながら、リディ

が堪えきれなくなつて涙を流した。

「ジンロ」

「大丈夫だ。きっとなんとかなる——だから帰ろう」

顔は見れないけど、ジンロが微笑んでいるが分かった。優しく髪を撫でられて、ジンロの心臓の音を聞いて、少しだけ不安が和らいだ。

確信なんてない。保証なんてない。

それなのにジンロが大丈夫だと言うと、本当に大丈夫な気がしてくる。

「うん——帰ろう。ジンロ」

作り笑顔ではなく、心の底から自然と笑みが零れた。

ジンロがリディを腕の中から解放し、手を差し出す。

「走れるか？」

「頑張る」

ここはまだ自分の戦場。リディは迷うことなくそう答えて、立ち上がった。

「無理はするなよ」

ぽん、とジンロに頭を撫でられて、リディは微笑む。子供扱いされていいるようで最初は少し嫌だったが、今ではそんなジンロの優しさが嬉しい。

足は相変わらず痛むけれど、最近ではこの痛みにも慣れてきた。

だんだんと屋敷の中が騒がしくなってきた。

「——見つかったな」

ぼつりとジンロが呟く。他の仲間が、という意味だ。ジンロとリディは今まで誰にも見られていない。

「急ぐぞ」

ぎゅ、とジンロがリディの手を握る力を強めた。リディはただ頷いて、手を握り返す。

扉を開け、二人は走り出した。

すぐに二人は見つかった。予想以上に追っ手が多い。

「見つけたぞ！ 盗賊だ！」

背後からそう叫ぶ声が聞こえて、ジンロが舌打ちした。

まるで出会った時の再現だ。

「——ジンロ」

以前の逃亡の時よりも増えている追っ手に、リディが不安になった。

「飛び込むぞ」

え？ と問い返すリディも、周囲を見て納得した。

見覚えのあるところを走っていた。この先にあるものを、リディは良く知っている。

「了解」

リディがそう答えたときには、もう地面を蹴っていた。

以前のように海に飛び込みながら、二人は決してお互いの手を放さない。

眩しいほどの朝日が、東の海から顔を出そうとしていた。

第六章

消える。

海に飛び込んだ瞬間、リディはそう確信した。

指先から、つま先から、徐々に徐々に泡となり、海に溶けるのだ。跡形も無く。

——ジンロ！

ついさっきまで固く手を握り締めてくれた存在を探した。

——いや！ 消えたくない！ 泡になんてなりたくない！

海面に出ようと伸ばした手の、指がもう消えかかっていることに気づいて愕然とした。こうしている今にも指が消え、手のひらが消えようとしている。

——やだ！ ジンロ！ 助けて！

リディの必死の叫びは声にすらならず、誰にも届かなかった。目から零れる涙さえもすぐに海の一部となる。

リディがどれほどもがいても、足掻いても、リディの身体はどんどん海の底へ沈んでいく。

こうして海の一部となるのか、とリディは薄れていく意識の中で思った。

——ジンロ。

リディは諦めるように目を閉じて、そのまま海に身を任せた。

最期の最期に優しい青年を思い出した。遠くから、彼がずっと呼んでいてくれる気がしたのだ。

——ごめんね、ありがとう。

そうしてリディは意識を手放した。

強く握っていたはずの手が消えた。

包んでいたはずの小さな手のぬくもりが、海に入った瞬間になくなって、ジンロは共に飛び込んだはずの少女の姿を探した。

「…………リディ？」

海に潜っても、海面に顔を出しても、ジンロの探す少女はいない。太陽が溶け出したかのように、海は朝日によって赤く染まっている。

『…………私、帰りたい』

震えながらそう呟いた少女を思い出して、ジンロは必死で彼女を探した。

海に何度も潜り、彼女の短い金の髪の輝きを探す。海面に戻っては赤く色づく海から彼女が顔を出さないかと周囲を見回す。

しかし、少女の姿はない。

「リディ！」

どんなに叫んでも、ジンロの呼び声に答える者は現れなかった。

——リディは泡となることはなかった。

意識を取り戻して周囲を見回せば、そこは小さな頃から自分の遊び場としていた——よくお姉ちゃんと一緒に来た秘密の洞窟。一人になってからは来た事がなかった。

「——どうして」

確かにリディは泡となり、見えかかっていたはず。なのにリディは今確かに生きていた。

人間になり、あの男に復讐するはずだったのに、目的は果たせなかった。ならば海の泡となり消えるのが人魚の運命。

苦しくもないし、どこも痛まない——どこも。

「——どうして？」

足が痛まなかった。

もうそこに痛みの原因となる足がなかったからだ。

そこにあるのは人魚の特徴。大地を駆ける足ではなく、海原を泳ぐ為の尾びれ。

——人魚に、戻っている。

リディはおそろおそろ自分の髪を梳いた。髪は肩に届く前に途切れる。短いままだった。

海の魔女のもとに行ったことは夢じゃない。

すべてが現実だったのに、なぜリディはここにいる？

リディは迷うことなく、すべてを知るであろう魔女のもとへ向かう。質問に答えてもらわなければならない。

「海の魔女！」

勢い良く駆け込んできたリディを見て、魔女は目を細めて笑った。

「ああ、元気そうですね。姫様」

「これはどうということなの、海の魔女。きちんとすべて説明してちょうだい」

怒るリディに、魔女はのんびりとしながら椅子に座るように指をさす。テーブルの上にはリディが来ることが分かっていたかのように、淹れたばかりの温かい紅茶が置いてあった。

「簡潔に申し上げれば、契約は無効です。姫様は復讐する為に人間になりましたが、その相手が既に死んでいた。それでは復讐などできませんからねえ。そんな契約で姫様の命を奪うのは公平じゃないでしょう？」

「契約が無効になったというのなら——私は髪の毛を渡したのになんたは私に何も与えていないわよ？ これは公平なのかしら？」

「お返ししても、くつつくものじゃありませんよ？」

そんなものいらないわ、とリディは即答する。

「それ相応のものを私にちょうだいと言っているの」

魔女がため息を吐き出し、仕方ありませんね、と呟いた。

「——何が欲しいんです？」

魔女は全てを見透かしているような、気味の悪い目でリディを見ってくる。リディはその瞳に恐れることなく、堂々と要求を口にした。

「人間になりたいの、もう一度私に人間の足をちょうだい」

魔女は目を丸くしてリディを見つめた。予想外の答えだったらしい。

「——何故？」

「帰ると、約束したからよ」

魔女にはますます理解できないらしく、首を傾げてリディに問う。

「それだけの為に三百年の寿命の三分の一にも満たない人生を選ぶと？」

「無駄だとも言いたいの？ 人の価値観は人それぞれよ」

魔女が窺うような目つきでリディを見る。

「恋ですか？」

リディは苦笑しながらいいえ、と答えた。嘘ではない。リディの

思いはまだ恋になっていないのだから。

「私、恋なんて知らないもの」

「———そうですか。まあいいでしょう。姫様が望むというのなら、支払われたものに相応しいだけのものは差し上げます。一応、もう一度説明しましょう。目的を果たされれば、あなたは本当の人間になります。足の痛みも消えるでしょう。あなたの目的は人間との約束を果たすことでよろしいんですね？」

「ええ、もちろん」

魔女はため息を吐き出すと、立ち上がって戸棚から一つの小瓶を取り出す。

「どうぞ」

「どうも———ああ、一つサービスしてくれるかしら？」
受け取りながらリディは魔女に問いかける。

「物にもよりますが、なんでしょう？」

「———服をちょうだい。人間が着るやつ。裸じゃ町を歩けないですよっ。」

足の痛みを堪えながら、リディは白い簡素なワンピースを身にまとった。

まだ濡れる髪をそのままにし、記憶の中にある道を歩く。
リディは木々の香りを胸いっぱい吸い込んで、満足げに微笑む。

さあ、行こう。

森の中、人々が知らない盗賊の隠れ里に。
一番に言うセリフはもう決まっている。

子供達がリディを指差し何か話している。

つられるようにこちらを見た青年は、驚いたように目を見開いた。

「——ただいま」

足の痛みがずっと、消えていく。

約束が果たされようとしている。

きつと、彼の返事を聞けばこの足は完全に人のものとなるのだろう。それはつまり海との永遠の別れを意味していた——けれど、不思議と寂しくは無い。

ほっとしたような、泣きたいような、そんな複雑な表情を浮かべて、彼は言う。

「おかえり、リディ」

ここから先は、誰もまだ知らないお伽噺。
人魚姫の先の、人魚姫。

リディの恋は、これから始まる。

第六章（後書き）

読了ありがとうございました。

この作品はエンキドさん主催の小説大会に参加させていただいております。

締め切りやら何やらでよい経験をさせていただいております。

言うまでもなくリディの『お姉ちゃん』は童話の人魚姫をモデルにしております。

あのラストが切なくて、どうにかならんものかと思ったのがこの話です。

童話の王子様は個人的に嫌いです。アホすぎる。恩人を間違えるなんて。

まあ、結果としてこういう物語が出来上がりました。

ここまで読んでくださった皆様に最大の感謝を込めて、
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2627e/>

人魚姫は恋を知らない

2010年10月8日14時28分発行